

特集にあたって

川尻文彦

たいへん僭越ながら、シンポジウムの「裏方」をつとめた者の一人としてこの文章を書かせていただきたいと思う。

恒例の中国現代史研究会の春合宿、シンポジウムは2006年3月27、28日（月、火）の両日、風光明媚な琵琶湖畔唐崎（芭蕉の俳句で有名な）において例年通り行われた。

シンポジウムは三年来、近現代中国における「統合」と「分節化」の諸相の解明を問題意識に掲げている。その一環として今回は「中央—地方」関係を共通テーマにとりあげることになった。

本研究会は扱う時期、方法論ともに研究の細分化が著しい昨今の学界の状況において、清代から今日にいたる近現代中国（さらには、明清まで）をトータルに把握せんとする大きな目標を掲げている（と諸先生方からお聞きしている）。換言すれば、歴史的な分析と現状分析の手法を融合させ、近現代中国の「連続性」をよりリアルにつかみとろうという野心を有している。その意味で、シンポジウムは二つ、もしくは三つの個別報告のばらばらな寄せ集めではなく、たがいにリンクさせ、より複眼的な視野の獲得を目指すものである。

幸運にも、今回、田原史起、吉澤誠一郎、平野聡の三人の新進気鋭のすぐれた論客を講師としてお招きすることができ、他研究会でも例をみないほど多面的に「中央—地方」関係を検討することが可能になった。この三名は研究対象とする時期や学問的な方法論（ディシプリン）、知的なバックグラウンドもそれぞれ異なり、バラエティーに富んでいる。三報告の内容の紹介については、西村成雄、久保亨、上原一慶各教授の詳細で的確な論評に譲るが、お三方それぞれの立場から「中央—地方」関係に鋭く迫るものであったとすることができる。

私の理解では、田原報告では「農村リーダー」の行動様式を理解する枠組みを大胆に提示した。私たちが農村問題や地方幹部の問題にアプローチする手がかりを提供してくれるものである。吉澤報告は従来さまざまな形で研究されてきた南京国民政府の「西北建設」をユニークな視点から論じ、政府レベルでの政策決定過程の実証分析に

とどまらず、「西北建設」の「論じられ方」にまで踏みこんだものである。平野報告は大清の統治イデオロギーまで視野に入れながら「中央—地方」関係を「中心・辺縁」「少数民族」等をキーにして論じる類例のないスケールの大きな内容であった。

以上、一部の専門研究者にとっては細かい異論があるかもしれないが、いずれも問題提起的で示唆に富む内容であったことは間違いなく、聴衆の一人として興味ぶかく拝聴させていただいた。

三報告を聞き、「中央—地方」が、中央政府、ジャーナリズム、知識人の言説、統治イデオロギー、在地の役人、さまざまなレベルで論じられていることに気づかされた。

また前近代中国の知県と今日の「農村リーダー」との連続性と非連続は如何にして論じることができるのか。「中央—地方」と言えば、古くは「封建」「群県」論が思い浮かぶ。伝統知識人がしばしば論じ、今日なお言及される「封建」「郡県」論は如何に評価できるのか。平野が言及する雍正帝の『大義覺迷録』などの清の統治イデオロギーと今日の中華人民共和国までの連続性を視野に入れることも重要である。梁啓超の「中国史叙論」(1901年)等を媒介にしながら、「中国」が「清」を直接的に継承した「国家」であることは疑いもない事実だからである。またしばしば指摘される清中期以降の「地方自治」の進展も焦点になりえる。清末の諮議局やその後の聯省自治も無視できない。「中央—地方」から派生する「沿岸・内陸」「都市・農村」もすぐれて今日的な課題である。

以上、今回、「中央—地方」で扱いきれなかった重要な論点も当然、多々ある。本シンポジウムではその場ですぐに解決できるような質のものではなく、今後私たちにとって深遠な課題になるような多くの論点が投げかけられた。それらをひとつひとつ解決していくことが私たちの使命である。

(かわじり ふみひこ・帝塚山学院大学)